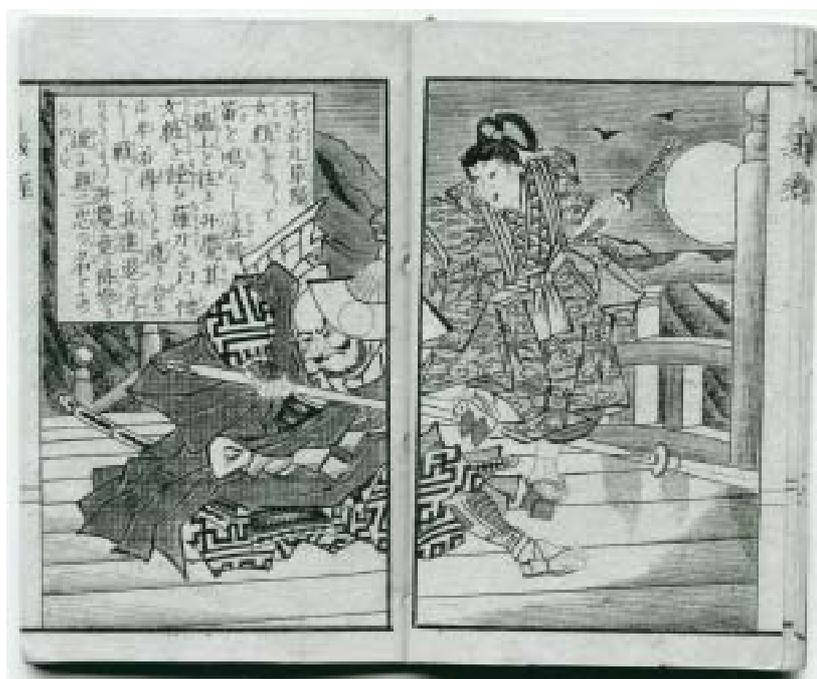


第136回常設展示

豆本 - ちひさきものの世界 -



画像は実物大です。

展示資料 5

『義経一代記』牧金之助編 深川屋豊 1885年 8.6×5.7cm

<当館請求記号 YDM91975>

国立国会図書館東京本館（本館2階 第1閲覧室前）

平成17年3月17日（木）～5月17日（火）

## はじめに

「なにもなにも、ちひさきものはみなうつくし」とは枕草子の一節です。「うつくし」は、現在では「かわいい」の意味になります。乗り物の模型や箱庭・盆栽の類など、「ちひさきもの」は、いつの時代も人を魅了してやまず、本も例外ではありません。

日本では、江戸時代に始まる小型本を総称して、豆本と呼んでいます。その大きさについては諸説あり、実際に各種辞典をみても、具体的な大きさをあらかず記述は見当たりません。また、袖珍本<sup>しゅうちん</sup>、巾箱本<sup>きんそう</sup>、寸珍本<sup>すんちん</sup>、芥子本<sup>かいし</sup>など、他の小型の本を意味する語についても同じことがいえます。これは、戦前の有名な豆本コレクションが、震災での焼失や売立てによる散逸によって、まとまった形で残存していないため、全体像がつかみきれないことが一因だと思われます。加えて、西洋においても聖書の小型化に端を発したとされる豆本の伝統が脈々と息づいており、その大きさを定義するのは難しいのです。

戦後、日本では一種の豆本ブームが巻き起こります。発端は1953年に小樽で刊行された「兪ぞまめほん」です。これをきっかけに、日本各地で郷土色を生かしたいいわゆる地方豆本、ご当地豆本が続々と刊行されるようになりました。趣向を凝らした豆本が刊行されるにつれ、それを収集する愛好家も増え、愛好家の中には自ら豆本製作をはじめた人まで現れました。このようにして、装丁や小ささにこだわった、凝りに凝った豆本が作られるようになったのです。

豆本収集家として有名だった市島春城(1860-1944)は、その著書の中で、厳密に言うなら縦2寸(約6cm)以下が豆本、としています。自身の収集対象は縦3寸5分(約10.6cm)、幅2寸5分(約7.6cm)を基準とし、この大きさが一番格好がよい、としています。戦後に出版された豆本の多くも、これとほぼ同じ縦10cm、横7cm(A7版。葉書の半分にあたる)という大きさが基準となっています。

今や一時の豆本ブームは過ぎ去ってしまいましたが、近年ではギネスブックの「世界最小の本」の記録を狙うための極小本も製作されています。ちなみに、現在ギネス記録は、1996年にロシアで刊行された0.9×0.9mm(!)の『カメレオン』です。

今回の展示では、明治初期から現在までに刊行された豆本の数々を、幅広く紹介いたします。清少納言も好んだ「ちひさきもの」の世界を垣間見てみませんか。

< > 内の資料は当館の請求記号になります。

請求記号が<YDM>で始まる資料は、マイクロフィッシュでの閲覧となります。展示期間中の利用も可能です。

展示資料53、54は**国際子ども図書館**での利用となります。

## 戦前期(明治期を中心にして)

小型の本は携帯に便利であり、どこへでも持ち運んで読むことができるため、江戸時代から旅行案内書をはじめとする実用書、手引書が数多く出版されました。また、草双紙や上方絵本などの絵草紙の影響を受けた婦女子向けの小型絵本や、江戸時代に流行った滑稽本や人情本をはじめとする小説も、明治時代になると、小型化、簡略化され数多く流通しました。明治末期から昭和にかけて、袖珍、寸珍と名のついた文庫や叢書などシリーズ本が多数刊行されますが、その多くは現在の文庫版と同じ縦 15cm ほどの大きさです。

今回は、豆本と呼ぶには一回り大きいサイズですが、多少緩やかに解釈して、縦 12、3cm までの大きさの本を展示しています。

### お伽噺

- 1 『さるかに合戦』、『金太郎一代記』、『舌切すゞめ』、『花咲ぢい』、『桃太郎一代記』、『かちかち山』、『ぶんぶく茶釜』、『猫の芝居』、『きつねの嫁入』、『鼠のかるわざ』

12×7.8cm

< YDM102912 >

堤吉兵衛編 堤吉兵衛 1885 年

代表的なお伽噺を子供向けに簡潔にまとめたものです。『猫の芝居』、『鼠のかるわざ』の2冊は、猫や鼠によって、有名な芝居の場面(道成寺など)やかるわざの様子が擬人化されています。『きつねの嫁入』にはその名のとおり天気雨の場面が描かれています。

### 人名録

- 2 『新撰明治百人一首』 10.6×7.5cm

< YDM86145 >

岡田霏船(良策)編 甘泉堂 1878 年

大久保利通や木戸孝允といった有名人を百人一首形式で紹介しています。明治期には有名人を百人一首形式で紹介する本が盛んに出版されました。

- 3 『近世名誉英雄伝』 11.8×8.7cm

< YDM4288 >

岡田霏船編 辻岡文助 1884 年

展示資料 2 と同一の编者です。一回り大きなサイズですが、和歌だけでなく、その人物の概略も記載されており、それぞれにルビも振られています。肖像もかなり詳細であり、銅板であることがわかります。50 人を収録しています。

## 歴史もの

### 4 『絵本三国誌』 11.8×8.8cm < YDM92185 >

尾関トヨ編 尾関トヨ 1886年

三国志の名場面が描かれています。漢字にはルビが振られています。展示箇所は、長坂橋で張飛が曹操軍を追い返す場面です。折込み図になっています。

### 5 『義経一代記』 8.6×5.7cm < YDM91975 >

牧金之助編 深川屋豊 1885年

この時期に出版された小型本の中でも一回り小振りの大きさです。小さいながらも、同年に出版された絵本(展示資料1)と比較するとかなり挿絵が細かいことがわかります。これは展示資料1が木版であるのに対して、この資料は銅板であるためです。

## 江戸時代の流行小説

### 6 『東海道膝栗毛』 12.3×8.4cm < YDM89554 >

十返舎一九著 木村文三郎 1883年

全十八巻ですが、国立国会図書館(以下、国会図書館)では、巻の二、五は所蔵しておりません。明治期には江戸時代に流行した滑稽本や人情本が袖珍本として盛んに出版されました。

### 7 『八犬伝』 8.6×5.7cm < YDM91975 >

牧金之助編 深川屋豊 1885年

展示資料5の『義経一代記』と同じシリーズです。滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』の八犬士を紹介しています。

## 名所案内・地図

### 8 『東京名所案内:画入』 2冊 9.2×6.6cm < YDM24153 >

安井乙熊編 文盛堂 1883年

東京の名所について区、郡ごとに簡単にその由来などを解説しています。折込みで当時の地図がついています。巻末に、主な観光地の案内や、主要駅間の運賃一覧表などが掲載されています。

- 9 『袖珍万国地図』 12.3×8.2cm < YDM27060 >  
ジョン・バルトロマイ著 松本謙堂訳 積善館 1895年  
英国の地理学会(Royal Geographical Society)会員であった John Bartholomew が編纂した小型地図帳の翻訳書です。72 枚の地図(銅板)を収録しています。

### 英語教材

- 10 『英語独学』 11.8×8.7cm < YDM82971 >  
網島亀吉編 網島亀吉 1887年  
単語帳です。単語ごとにアルファベットの綴りと片仮名の読み、日本語の意味、そのイラストが記されています。
- 11 『和英会話日用通弁』 11.3×8.1cm < YDM84374 >  
小出留五郎編 池田孝吉 1884年  
「ひとへ詞の部」(単語)と「はなしの部」(簡単な日常会話)からなります。日本語(仮名)と英語(片仮名)を対応させたページ構成になっています。アルファベットは使われておらず、凡例には「此書八只婦女児童をして容易く彼の語をしらしめんがため勉て国字のみを記載して其捷徑ならん事を要す」とあります。

### 漢籍

- 12 『四書集註』 5冊 11.5×8.3cm < YDM8540 >  
朱熹(撰) 後藤(芝山)点 井口昌蔵等 1881年  
四書(「大学」「中庸」「論語」「孟子」)についての注釈書です。宋の朱熹の撰であり、訓点を施したのは、江戸時代の漢学者の後藤芝山になります。芝山が施した四書、五經の訓点は「後藤点」と呼ばれています。国会図書館では、同時期に出版された小型の『四書集註』を展示本以外に8点所蔵しています。

### 実用書・手引書

- 13 『開化自由便』 11.5×8.4cm < YDM101758 >  
沢久次郎著 沢久次郎 1888年  
江戸時代までの国が、廃藩置県後のどの府県にあたるのかを記した「日本使府県国盡」ほか、いろはの練習帳である「七ついろは」、「開化勸農往来」を含む実用書です。

- 14 『四季部類大全』 8.4×5.9cm < YDM87076 >  
花屋庵鼎左著 辰一井拳一校 中山勝次郎 1880 年  
季節ごとに季語を列挙したかたちの歳時記です。
- 15 『長唄全集:袖珍節付』 12.5×9.2cm < YDM74091 >  
町田桜園編 盛林堂 1909 年  
長唄の楽譜です。冒頭「本書の特色」には、「袖珍美本なれば、音楽会等に懐中せらるるも、また机上の装飾とするにもよろし」とあります。
- 16 『新法附典類纂 問答註釈』 11.6×9cm < YDM36070 >  
大島細吉編 彫雲堂 1882 年  
「刑法附則」、「治罪法」、「監獄則」を収録し、問答形式で解説しています。折込み図では監獄内で囚人が身につける覆面や、足枷が図解されています。  
この資料は議会官庁資料室での利用となります。
- 17 『座敷即席一口噺し』 11.1×7.6cm < YDM98090 >  
伊藤竹次郎編 伊藤竹次郎 1885 年  
1 ページに 1 ネタの小噺集です。庶民生活の中のちょっとした事柄を掛け言葉で表した読み物です。

## 戦後(豆本出版の興隆、趣味の本へ)

1953 年に小樽で刊行された「糸ぞまめほん」をきっかけに、版元の地名を冠した「越前豆本」、「名古屋豆本」、「豊前豆本」といったご当地豆本・地方豆本が、北は北海道から、南は九州まで続々と創刊されました。内容的には、郷土色が強く、その土地ゆかりの作家や風習などに関するものが多いですが、趣味の本なども多く、その装丁とあわせて多種多様です。今回は、その中から代表的な地方豆本を、北から南の順で展示します。

大阪万博が開催された 1970 年には古書通信社から「古通豆本」が創刊されるなど、多くの豆本が刊行されました。また、ギネスブックの「世界最小の本」の記録を狙って小ささを追求するマイクロブックや、豪華な装丁の美術品のような豆本も刊行されるようになりました。しかしながら、発行者の死亡やその他の事情により休刊や廃刊が相次ぎ、現在も刊行されている豆本はごくわずかとなってしまいました。

## 地方豆本等シリーズ豆本

### 糸ぞまめほん

戦後の豆本ブームの発端となったシリーズです。1953年に小樽で、佐藤与四郎氏によって刊行され、1962年の37号まで続きました。残念ながら、国会図書館での所蔵は、1957年刊の第17号からになります。

- 18 『母への手紙』(糸ぞまめほん第18号) 8.9×6.8cm < 723.5-cG61h-S >  
ヴァン・ゴッホ著 式場隆三郎訳 北海道豆本の会 1957年
- 19 『書物の扱い方』(糸ぞまめほん第19号) 5.5×4.5cm < 020-Sy965s >  
庄司浅水著 北海道豆本の会 1957年
- 20 『アイヌ民話と唄』(糸ぞまめほん第27号) 9.2cm×6.9cm < 388.11-Ti286a2 >  
知里真志保著 北海道豆本の会 1960年
- 21 『いも版えぞ十二支』(糸ぞまめほん第33号) 9.1×6.8cm < 736-Ka164e >  
香川軍男著 北海道豆本の会 1961年

### あおり豆ほん

版画家である佐藤米次郎氏により、1954年に刊行されました。全てが手作りであるため、部数も100部に限られています。大阪万博を記念して、さらに小型のよねじろう豆本も刊行されました。展示資料23は展示資料22を小型化したものです。

- 22 『十わたこものがたり』 9.8×10.4cm < Y99-19 >  
さとうよねじろう作 豆本の会 1961年
- 23 『十和田湖物語』 3.7cm×4.5cm < Y99-129 >  
さとうよねじろう作 刊行年不明

### 緑の笛豆本

大判の版画集『緑の笛』を20冊刊行した後、1965年8月より豆本となりました。弘前の蘭繁<sup>らん</sup>之氏が版元です。当館では、1975年刊の第79集より所蔵しています。現在でも刊行中であり、内容的には多岐にわたりますが、石川啄木や太宰治など文学に関する書物が多いのが特徴です。

- 24 『宮沢賢治と南部』(緑の笛豆本第310集) 9.4×7.4cm < Y99-E249 >  
宮城一男著 緑の笛豆本の会 1994年
- 25 『太宰との接点』(緑の笛豆本第321集) 9.4×7.5cm < Y99-E282 >  
木立民五郎著 緑の笛豆本の会 1995年
- 26 『啄木と岩手日報』(緑の笛豆本第354集) 9.5×7.5cm < Y99-G85 >  
駒井耀介著 緑の笛豆本の会 1998年

#### 糸ちぜん豆本

1964年に福井の佐々木了氏が発行し、第5号から青木隆氏の発行となりました。郷土色あふれる内容で、最終号まで38冊を数えましたが、国会図書館の所蔵は佐々木氏が発行した初期の3冊のみです。

- 27 『越前加美鑑』(糸ちぜん豆本第1号) 7.8×10.9cm < Y99-22 >  
則武三雄著 笠松一夫画 佐々木了方豆本の会 1964年
- 28 『越前の古窯』(糸ちぜん豆本第3号) 7.8×10.9cm < Y99-21 >  
越野達郎著 佐々木了方豆本の会 1965年

#### 名古屋豆本

1967年に名古屋タイムズ社長であり、作家、画家でもある亀山巖氏が発行を始めました。郷土史から趣味的なものまで、内容は多岐に渡ります。

- 29 『芭蕉名古屋秘聞』(名古屋豆本第9冊) 9.9×7cm < Y99-97 >  
竹田敦著 亀山巖 1968年
- 30 『尾張千石船』(名古屋豆本第13集) 10.4×7.2cm < Y99-94 >  
川合彦充著 亀山巖 1969年

#### あかしまめほんらんぶ叢書

兵庫県在住の文化人100名が会員となり、各会員が1冊ずつ執筆するという趣旨で発足し、100号を目標に1974年に刊行を開始したようですが、26号で中断してしまいました。

31 『芭蕉と切支丹』(らんぶ叢書第16編) 10.2×7.6cm < Y99-204 >  
上月乙彦著 明石豆本らんぶの会 1972年

32 『日本の凧』(らんぶ叢書第19編) 9.9×7.3cm < Y99-208 >  
井上重義著 明石豆本らんぶの会 1972年

#### 豊前豆本

北九州の教員であった岡田始氏が1972年に刊行を始めました。展示資料の2点を始め、凝った装丁の本が多いのが特徴です。

33 『教育文具小文化史』(豊前豆本の会第23集) 10.4×7.3cm < Y99-567 >  
岡田始著 岡田始 1982年

34 『たばこ珍話』(豊前豆本の会第33集) 3.8×7cm < Y99-718 >  
岡田始著 岡田始 1984年

#### 古通豆本

古書通信社が刊行している豆本です。1970年の大阪万博を機に刊行されました。書物に関わるテーマが多く、内容的にも充実しています。展示資料は全て並製ですが、他に革装や布装といった特装版も刊行されています。現在でも刊行されている数少ないシリーズ豆本の一つです。

35 『漱石本雑話』(古通豆本44) 10.2×7.4cm < Y99-465 >  
岡野他家夫著 日本古書通信社 1980年

36 『ケルムスコット・プレス』(古通豆本45) 10.1×7.3cm < Y99-483 >  
八木佐吉著 日本古書通信社 1980年

37 『近世の蔵書家』(古通豆本53) 10.1×7.3cm < Y99-575 >  
朝倉治彦著 日本古書通信社 1982年

38 『明治大正の新聞から』(古通豆本57) 10×7.2cm < Y99-595 >  
森銑三著 日本古書通信社 1982年

39 『洋語辞書事始』(こつう豆本72) 10×7.3cm < Y99-826 >  
惣郷正明著 日本古書通信社 1986年

## 単行豆本

### マイクロ文庫

今野書房が版元の豆本シリーズです。国会図書館の所蔵は展示資料の2冊のほか、『藪の中』、『イソップ寓話集』の計4冊です。各本に内容説明書が付属しています。

「装丁は貼り表紙、見返しは和紙、角背。(中略)大型上製本の雰囲気を持った超豆本です。」(内容説明書 - マイクロ文庫の体裁 - )

40 『悲しき玩具』 2.3×1.6cm < Y99-83 >

石川啄木著 図書出版今野書房 1968年

41 『杜子春』 2.3×1.6cm < Y99-84 >



芥川龍之介著 図書出版今野書房 1968年

左図は実物大です。

### 星野麻夫の豆本

豆本作家星野麻夫氏による豆本です。内容の選択、装丁材料から、折り綴じにはじまる製本、函作り、彫金の全てが同氏の手作りで、各本について通常版と特装版があります。展示資料は全て特装版です。

42 『赤い靴』 2.8×2.8cm < Y99-586 >

H.C.アンデルセン著 山田佐智夫訳 創作豆本工房 1982年

43 『蜘蛛の糸』 2×2.1cm < Y99-600 >

芥川龍之介著 創作豆本工房 1982年

44 『きりしとほろ上人伝』 2.4×2.6cm < Y99-671 >

芥川龍之介著 創作豆本工房 1983年

45 『芭蕉句集』 4×3.1cm < Y99-748 >

松尾芭蕉著 創作豆本工房 1985年

- 46 『ぢいさんばあさん』 3.1×2.9cm < Y99-814 >  
森鷗外著 創作豆本工房 1986年

- 47 『夢十夜』 4×3.3cm < Y99-846 >



夏目漱石著  
創作豆本工房  
1987年  
左図は実物大です。

### 聖書

- 48 『モーゼの創世記.第1章』 0.35×0.35cm < Y99-29 >  
凸版印刷 1965年

出版当時の世界最小の本です。「トッパンマイクロブック」シリーズとしてとして同時期に『小倉「百人一首」』< Y99-28 >なども刊行されています。文字の大きさは120ミクロン、太さは髪の毛の約5分の1になります。拡大鏡付きケース入りです。現在、凸版印刷社は0.95×0.95mmのマイクロブック『十二支』を出版していますが、ギネス認定の世界最小の本は、1996年にロシアで刊行された『カメレオン』(0.9×0.9mm)です。

- 49 『新約聖書』 3.4×2.6cm < Y99-562 >



日本聖書協会 1982年  
キーホルダー付きケース入りです。箱には「一番小さい新約聖書」と銘打っています。  
左図は実物大です。

### 真珠社の豆本

真珠社は推理小説家江戸川乱歩の実弟平井通主宰の出版社です。芸術性の高い豆本が多いのが特徴です。1959年から1970年までに、27点の豆本を出版しています。

- 50 『東京の芸者の一日』 11×7.1cm < 734-cB59t >  
ピゴ画 勝本清一郎解説 真珠社 1962年

51 『楊貴妃』 9.5×7cm < Y99-4 >  
池田満寿夫著 真珠社 1964 年

52 『えどがあ・あらん・ぼを“黒猫”のための雑絵本』 5.7×6.5cm < Y99-43 >  
えっちんぐいそ孿著 真珠社 1965 年

### 子ども向けなど

53 『マザーグースおばさんまたは金のたまご』 (*Old Mother Goose; or, The Golden Egg.*)  
10.3cm×6.6cm < Y9-N04-H48 >

54 『トロットおばあさんとゆかいなネコ』 (*Old Dame Trot and Her Comical Cat.*)  
9.7×6.7cm < Y9-N04-H48 >  
ほるぶ出版 1996 年

オックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵のオーピーコレクションを、ほるぶ出版が『マザーグースの世界 オーピーコレクション pt.2』として復刻したものうち、豆本サイズのチャップブック2点を展示しています。マザーグースとは、英国古来の伝承童謡の総称です。53は、1803年～1841年にイングランド北部の都市、ヨークでJ.ケンドルーによって、54は1820年ごろにロンドンでJ.E.エヴァンズによって出版されたものの複製です。

展示資料 53、54 は国際子ども図書館での利用となります。

55 『クリちゃん 1・2』 10.1×7.8cm < Y99-338 >  
根本進著 凸版印刷 1967 年

1951年から朝日新聞の夕刊で連載していた4コマまんがです。セリフのないサイレントまんがで、家庭の日常風景がほのぼのと描かれています。

56 『のばらチャン文庫』 10×10cm < Y99-39 >  
日本勧業銀行 刊行年不明

幼児向けのよみものです。動物なぜなぜシリーズ・動物知恵シリーズ・動物愛情シリーズ・乗りものシリーズ・民話シリーズなどがあります。当館では23冊所蔵しています。「ゾウの鼻はなぜながい」、「ヘリコプターのコップさん」、「やまんばのにしき」、「アザラシの赤ちゃん」、「なかよしミツバチ」の5冊を展示しています。

## 原コレクションの西洋豆本

国会図書館では、洋書は選択して購入しており、いわゆる豆本は、購入対象とはなっておりません。そのため、国会図書館で所蔵している西洋豆本は、国際交換や寄贈という方法で入手したものとなります。その中で、アルゼンチンにおいて広く貿易商を営んでいた原昇氏(1904-1987)が、現地で私設の図書館を建設するために収集していた資料と、原氏の父の代から経営していた原商会関係の資料からなる「原コレクション」には、点数は多くはありませんが、19世紀の豆本が含まれています。

**57 *Homeri Ilias et Odyssea*. 11.2 × 7cm < VF5-Y4214 >**

**2 vols., Londini, G. Pickering, 1831.**

ホメロス作と伝えられる古代ギリシアの長編叙事詩です。ともに、紀元前8世紀頃の成立とされています。『イリアス』は、スパルタの美女ヘレネをめぐる、トロイア軍とギリシア軍との10年にわたるトロイア攻防のうち、数十日間の出来事を描いています。『オデュッセイア』は、オデュッセウスが、トロイア戦争からの凱旋帰国の途中に体験した10年にわたる漂流と、不在中に王妃ペネロペに言い寄った男たちへの報復を描く物語です。

**58 *Oeuvres de La Rochefoucauld*. 9.1 × 5.8cm < VF5-Y4216 >**

**Paris, Dufour et Compagnie, 1827.**

1678年に出版された *Réflexions ou Sentences et Maximes morales* の第5版に、「ラ・ロシュフコー公爵の自画像」(Portrait du Duc de La Rochefoucauld, fait par lui-même) や「様々な考察」(Réflexions diverses) などが加えられています。『ラ・ロシュフコー箴言集』や『ラ・ロシュフコー格言集』などの書名で邦訳されています。

**59 *The vicar of Wakefield, by Dr. Goldsmith*. 10.7 × 6.7cm < VF5-Y4215 >**

**Tilt and Bogue, London, 1838.**

オリバー・ゴールドスミスによって1766年に発表された長編小説です。

**60 *The plays of Shakespeare*. 9.3 × 5.2cm < VF5-Y-4217 >**

**9 vols., London, William Pickering, 1825.**

シェイクスピアの正典とされる37の戯曲が、全9冊に収められています。

## 主要参考文献

- 1 『春城随筆』市島春城著 早稲田大学出版部 1926年 <536-231>
- 2 『当世豆本の話』斎藤昌三著 青園荘 1946年 <UM11-33>
- 3 『現代日本の豆本』(古通豆本2)今村秀太郎著 日本古書通信社 1970年  
<Y99-109>
- 4 『私の稀覯本』今井田勲著 丸の内出版 1976年 <UM11-25>
- 5 『現代豆本書目 シリーズ豆本』(古通豆本48・49)今村秀太郎編 日本古書通信社  
1981年 <Y99-514>
- 6 『現代豆本書目 単行豆本』(古通豆本50)今村秀太郎編 日本古書通信社 1981年  
<Y99-514>
- 7 『幕末・明治豆本集成』加藤康子編著 国書刊行会 2004年 <UP74-H11>

3、5、6は、豆本の形で刊行されています。